



おお、わたしの魂よ、わたしはおまえに、嵐のように「否」という権利を与え、晴れ渡った空が「然り」と言うように「然り」と言う権利を与えた。

——フリードリッヒ・ニーチェ著／氷上英廣訳「ツァラトゥストラはこう言った」

——（目標群ガンマ、出現！）

リルリの声が通信ネットワークに響く。

それは、目標群アルファ、ベータと定義されたI体とR体が、軌道上でのドッキングを開始したことを意味する。ラリラがI体を投射した時間はバラバラだが、会合したタイミングはほぼ同時だった。

——（ガンマ1く5は、第一分隊、ガンマ6く10は第二分隊、ガンマ11く15は第三分隊が担当、ガンマ16く22は私と……）

それからリルリは私の方を見た。

——（恵衣様が担当します！）

本来は、これだけ戦力がそろっているのだから、私の参戦は必要なかったはずだ。だが、リルリは私の言葉を覚えていて、敢えて私に担当させてくれるというのだろう。

——（R・リルリ、それは……）

恵夢は何か言いかけたが、そこで黙った。

——（……あなたがそう判断するというのなら、了としましょう）

そして、彼女の部下に向けて通信する。

——（目標配分はR・リルリ指示の通り。それぞれの個別目標分担は各分隊長に一任。第一分隊は私が直接指揮する。第二分隊は浜田緒卵准尉、第三分隊小鳥遊圭妃准尉。かれ！）

目標群ガンマと呼称されたI体とR体は、一瞬の会合の後、互いにC2NTAMのケーブルをつなぐ。今、そのケーブルがぐんぐん伸びていく。

そして、伸びきった瞬間。

私の目の前にも、その一つが存在した。

（お願い……世界を、……救って！）

私は祈るような気持ちでATBを振りかぶり、力の限り振り下ろした。

激しい衝撃が手に伝わる。凄まじい堅さのケーブルが、私の一振りで切断された。

目にもとまらぬ勢いで縮んでいくケーブル。私のガスジェットは、ケーブルに巻き込まれないよう、急速に離れていく。

恵夢指揮下の自衛軍将兵も、一斉に担当のケーブルを切断する。流石にプロは違う。私のようなぎこちない動作ではなく、慣れた手つきで強靱なケーブルを、一瞬のタイミングを見逃さず切断していく。

リルリはもつと素早い。自らが担当する6つを次々と切断していく。だが、最後の一つは、彼女は切断せず、奇妙なことに激しくキックするにとどめた。

——（目標群ガンマ2 1基消滅。目標群アルファおよびベータ出現。軌道確認……：大気突入角度確認……：全て、大気からはじかれます……：一つを除き、地上には落下しません）

リルリが冷静に通信する。

——（……：与那国サーバを目標としていた一つは、軌道をずれ、馬祖基地に落下します）

——（了とする。正しい判断だ。現場の部隊は、ラリラを直前まで足止めした後、待避するよう要請しよう）

恵夢は言った。

——（ラブ||リルリと言ったか……これだけ状況が好転したんだから、アイドルへの夢をもって戦ってくれればいいけれど）

——（大丈夫でしょう）  
フィル||リルリは言った。

——（もともと、少々の困難で諦めるような夢ではありません。これだけ状況が好転すれば……きつとやってくれますよ）